

臨床工学技士が内視鏡センター業務へ介入した際の問題点

I.研究目的

近年、医療現場では人員不足が深刻化しており、医師や看護師の業務負担軽減を目的としたタスクシフトが進められている。その中で臨床工学技士（CE）にも業務拡大が求められており、当院では約3年前より内視鏡業務への介入を開始した。これまでに11名のCEが業務に携わっており、段階的な教育を実施している。本報では、介入にあたり、実施した教育体制及び現場で浮上した課題を明確化し改善することを目的とした。

II.研究方法

内視鏡業務に携わる3名の医師、12名の看護師、11名のCEを対象に無記名アンケート調査を実施した。アンケート内容は①CE介入への賛否、②業務効率や安全性への影響、③教育・訓練体制の評価、④役割分担と業務範囲の明確さ、⑤コミュニケーション、⑥問題点や改善点・今後の期待事項・その他意見で構成した。①～⑤を5段階評価、⑥を自由記述で回答を求めた。

III.結果

5段階評価の平均値は以下の通りであった。

- ①医師・看護師：4.2点 CE：4.2点
- ②医師・看護師：4.2点 CE：3.0点
- ③医師・看護師：3.9点 CE：3.0点
- ④医師・看護師：4.1点 CE：2.8点
- ⑤医師・看護師：4.3点 CE：3.3点

自由記述では、医師・看護師から業務負担が軽減したなどの肯定的な意見が多かった。一方で、他職種との連携に関する課題も指摘された。今後の期待事項として、機械知識の向上や勉強会の開催、内視鏡関連資格の習得などが挙げられた。CEからは、介入時の教育体制や職種間の業務範囲に関する課題が指摘された。

IV.考察

医師及び看護師はCE介入により業務効率や安全性の向上、負担の軽減が得られたと評価しており、内視鏡領域におけるタスクシフトの有効性が示唆された。一方、CE自身は教育体制の不足や業務範囲の曖昧さを課題として挙げており、職種間の認識の差が明らかとなった。また、内視鏡業務は緊急対応や高度な危機管理を伴うため、統一された教育体制を設けることがCEの専門性向上と安全性確保に直結すると考えられた。

V.結論

内視鏡業務へのCE介入は、現場の評価から一定の有用性を示した。今後は、段階的な教育プログラムの体系化、内視鏡業務における各職種の業務範囲と責任分担の明確化、職種間の連携強化が不可欠である。これらを整備することで、CEが専門性を発揮しやすい環境を構築し、安全かつ効率的な内視鏡業務の提供に寄与できると考える。

引用文献